巻頭言

もっと知的説得への努力を

山　崎　正　和

大学紀要の論文をだれが読んでいるか。筆者その人と編集委員だけだという、悪い冗談がある。困ったことは、この冗談が半ば真実を言い当てているということだろう。

学会の雑誌にも似たような弊害は見られるが、まだしも学会には専門を同じくする競争者というものがいる。相互の監視が筆者をある程度は緊張させるだろうが、大学には同じ専攻を持つ同僚の数が少ない。専門が違えば評価は難しいうえに、職場で席を並べていれば遠慮が先立つということもある。いきおい大学紀要の筆者の姿勢はゆるみがちになり、編集委員の目も甘くなりがちなのである。

研究論文の質という場合、問題はじつは二つに分けられる。研究そのものの独創性や先駆性が問われるのは当然だが、それとともにその研究内容を他人に表現する努力が問題になるのである。研究という行為には宿命的なジレンマがあって、優れた研究ほど独創的であるがゆえに、他人には本質的にわかりにくいものである。だが他方、真実は普遍的でなければならないから、他のだれにもわからない発見などは研究とは呼べない。真に尊敬に値する研究とは、したがって独創性の孤独と説得の努力という、あい矛盾するものの両立のうえに成立するといえるだろう。

裏返していえば、広い読者を説得する努力を怠っていると、研究の独創性を求める迫力もおのずから弱まってしまう。近年の学問に見られる現実の傾向であるが、専門を細分化して蛸壺に立てこもれば、つまらない発見でも研究者の権威を楽に守れるからである。とくに社会科学や人文学においては、学問的真実とは説得のなかにのみ成立するとさえいえる。自然科学の真実はテクノロジーという実力行使を通じて、説得のきかない相手にも承服させることができるが、文科系の学問にはそんな芸当はできない。ここでは広いか狭いかの別はあっても、社会が理解して共有してくれた発見だけが真実なのである。

ところで学問研究の二面のうちで、独創性を育てる教育方法というものはない。独創性は半ば天分であり、半ばは運のよしあしの産物である。だがこれにたいして、他人を説得し理解を求めることは本人の努力によって不可能ではない。もちろん研究論文は文芸作品ではないから、美辞麗句を尽くして人を酔わせる必要はない。また学問は過去の蓄積のうえに立っているから、それをまったく知らない万人を納得させることも難しい。しかし研究者に誠意があり、自

己を客観的に見る謙虚さがあれば、少なくとも専門を異にする大学の同僚を説得することはできるだろう。

大学紀要にもし意味があるとすれば、そして専門学会誌にはない役割があるとすれば、それはこの異分野交流の場となることであろう。紀要に論文を書く経済学者は、少なくとも法学者や社会学者の同僚に理解できる文体で書くべきである。専門術語を使うのはよいが、それが文脈そのものによって広く理解されるように努めるべきである。そして編集委員は本来のレフェリーの役割を自覚して、その学問的な意義がわからないような論文は、あえて素人の名において拒否しなければならない。論文に意義があるかどうか、説明責任は筆者の側にあると考えるべきである。

この問題はしかし、じつをいえば論文の発表以前に始まっていると考えられる。学者は研究そのものに取り組むまえに、それが真に意義ある研究であることを説明できなければならないのである。研究に意義があるということは、いうまでもなくそれが実用に役立つということではない。学問の体系全体のなかで、もっといえば知的世界全体の透視図のなかで、その研究がどんな位置を占め、どんな貢献を果たすかということである。その学問分野が昔からあるからということではなく、類似の研究が学界の常識になっているからということでなく、真に知的世界の根源（ラディクス）から反省して、その研究がいまここでやるに値いするという切実さである。

この自己評価を具体的におこなうために、私は研究者諸氏に研究助成の申請をされるように勧めたい。とくに文部科学省の科学研究費ではなく、いくつもある民間財団の助成金に挑戦されることを求めたい。そこでは多くの場合、既製の学界階層秩序とは無縁に、異分野混合の審査委員会が設けられているからである。そこでは申請者は各専門分野の職業的「隠語」ではなく、平明に開かれた言葉で研究を説明しなければならない。おのずから研究者が自分の専門を反省し、惰性的な独善から抜け出ることが要求されるのである。

このところ大学の教育について、外部評価の必要を叫ぶ声が高まっている。それは当然の時代潮流であるが、じつはそれに劣らず不可避なのは学問研究の外部評価なのではないだろうか。教育体制の変革に大胆に取り組み始めた東亜大学であるが、その同じ勇気を研究改革にも向けたいものである。